

**[B年] 聖霊降臨節第3主日(2026年6月3日)****【旧約聖書日課】歴代誌下 15章1～8節**

<sup>1</sup>オデドの子アザルヤに神の霊が臨んだ。<sup>2</sup>彼はアサの前に進み出て言った。「アサよ、すべてのユダとベニヤミンの人々よ、わたしに耳を傾けなさい。あなたたちが主と共にいるなら、主もあなたたちと共にいてくださる。もしあなたたちが主を求めるなら、主はあなたたちに御自分を示してくださる。しかし、もし主を捨てるなら、主もあなたたちを捨て去られる。<sup>3</sup>長い間、イスラエルにはまことの神もなく、教える祭司もなく、律法もなかった。<sup>4</sup>しかし彼らは、苦悩の中でイスラエルの神、主に立ち帰り、主を求めたので、主は彼らに御自分を示して下さった。<sup>5</sup>そのころこの地のすべての住民は甚だしい騒乱に巻き込まれ、安心して行き来することができなかった。<sup>6</sup>神があらゆる苦悩をもって混乱させられたので、国と国、町と町が互いに破壊し合ったのだ。<sup>7</sup>しかし、あなたたちは勇気を出しなさい。落胆してはならない。あなたたちの行いには、必ず報いがある。」

<sup>8</sup>アサはこの言葉と預言者オデドの預言を聞いて、勇気を得、ユダとベニヤミンの全土から、またエフライムの山地で攻め取った町々から、忌むべき偶像を除き去り、主の前庭の前にある主の祭壇を新しくした。

**【使徒書日課】使徒言行録 4章13～31節**

<sup>13</sup>議員や他の者たちは、ペトロとヨハネの大胆な態度を見、しかも二人が無学な普通の人であることを知って驚き、また、イエスと一緒にいた者であるということも分かった。<sup>14</sup>しかし、足をいやしていただいた人がそばに立っているのを見ては、ひと言も言い返せなかった。<sup>15</sup>そこで、二人に議場を去るよう命じてから、相談して、<sup>16</sup>言った。「あの者たちをどうしたらよいだろう。彼らが行った目覚ましいしるしは、エルサレムに住むすべての人に知れ渡っており、それを否定することはできない。<sup>17</sup>しかし、このことがこれ以上民衆の間に広まらないように、今後あの名によってだれにも話すなど脅しておこう。」<sup>18</sup>そして、二人を呼び戻し、決してイエスの名によって話したり、教えたりしないようにと命令した。<sup>19</sup>しかし、ペトロとヨハネは答えた。「神に従わないであなたがたに従うことが、神の前に正しいかどうか、考えてください。<sup>20</sup>わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです。」<sup>21</sup>議員や他の者たちは、二人を更に脅してから釈放した。皆の者がこの出来事について神を賛美していたので、民衆を恐れて、どう処罰してよいかわからなかったからである。<sup>22</sup>このしるしによっていやしていただいた人は、四十歳を過ぎていた。

<sup>23</sup>さて二人は、釈放されると仲間のところへ行き、祭司長たちや長老たちの言ったことを残らず話した。<sup>24</sup>これを聞いた人たちは心をつにし、神に向かって声をあげて言った。「主よ、あなたは天と地と海と、そして、そこにあるすべてのものを造られた方です。<sup>25</sup>あなたの僕であり、また、わたしたちの父であるダビデの口を通し、あなたは聖霊によってこうお告げになりました。」

『なぜ、異邦人は騒ぎ立ち、  
諸国の民はむなしいことを企てるのか。』

<sup>26</sup>地上の王たちはこぞって立ち上がり、

指導者たちは団結して、  
主とそのメシアに逆らう。』

<sup>27</sup>事実、この都でヘロデとポンティオ・ピラトは、異邦人やイスラエルの民と一緒にあって、あなたが油を注がれた聖なる僕イエスに逆らいました。<sup>28</sup>そして、実現するようにと御手と御心によってあらかじめ定められていたことを、すべて行ったのです。<sup>29</sup>主よ、今こそ彼らの脅しに目を留め、あなたの僕たちが、思い切って大胆に御言葉を語るができるようにしてください。<sup>30</sup>どうか、御手を伸ばし聖なる僕イエスの名によって、病気がいやされ、しるしと不思議な業が行われるようにしてください。」

<sup>31</sup>祈りが終わると、一同の集まっていた場所が揺れ動き、皆、聖霊に満たされて、大胆に神の言葉を語りだした。

**【福音書日課】マルコによる福音書 1章29～39節**

<sup>29</sup>すぐに、一行は会堂を出て、シモンとアンデレの家に行った。ヤコブとヨハネも一緒であった。<sup>30</sup>シモンのしゅうとめが熱を出して寝ていたので、人々は早速、彼女のことをイエスに話した。<sup>31</sup>イエスがそばに行き、手を取って起こされると、熱は去り、彼女は一同をもてなした。<sup>32</sup>夕方になって日が沈むと、人々は、病人や悪霊に取りつかれた者を皆、イエスのもとに連れて来た。<sup>33</sup>町中の人々が、戸口に集まった。<sup>34</sup>イエスは、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちをいやし、また、多くの悪霊を追い出して、悪霊にものを言うことをお許しにならなかった。悪霊はイエスを知っていたからである。

<sup>35</sup>朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。<sup>36</sup>シモンとその仲間はイエスの後を追い、<sup>37</sup>見つけると、「みんなが捜しています」と言った。<sup>38</sup>イエスは言われた。「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである。」<sup>39</sup>そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 歴代誌下 15章1～8節

<sup>1</sup>オデドの子アザルヤに神の霊が臨んだ。<sup>2</sup>彼はアサの前に出て言った。「聞け、アサよ。ユダとベニヤミンのすべての人々よ。あなたたちが主と共にいるなら、主はあなたがたと共におられる。もしあなたがたが主を求めらば、主はあなたがたに現れてくださる。しかし、もし主を捨てるなら、主はあなたがたを捨てられる。<sup>3</sup>長い間、イスラエルにはまことの神もなく、教える祭司もなく、律法もなかった。<sup>4</sup>しかし彼らは、苦悩の中でイスラエルの神、主に立ち帰り、主を求めたので、主は彼らに現れてくださった。<sup>5</sup>その頃は、出て行く者にも入って来る者にも平安はなく、すべての地の住民は甚だしい騒乱に巻き込まれていた。<sup>6</sup>国は国に、町は町に打ち砕かれた。神があらゆる苦しみで彼らをかき乱したからだ。<sup>7</sup>しかし、あなたがたは強くあれ。力を落としてはならない。あなたたちの働きには、報いがあるからだ。」

<sup>8</sup>アサは、この言葉と預言者オデドの預言を聞くと、勇気を奮い起こし、ユダとベニヤミンの全土から、またエフライムの山地で攻め取った町から、憎むべきものを追放し、主の廊の前にある主の祭壇を新しくした。

## 使徒言行録 4章13～31節

<sup>13</sup>人々は、ペトロとヨハネの堂々とした態度を見、二人が無学な〔直訳→文字を知らない〕普通の人であることを知って驚き、また、イエスと一緒にいた者であることも分かった。<sup>14</sup>しかし、足を癒された人がそばに立っているのを見ては、何も言い返せなかった。<sup>15</sup>そこで、二人に議場を去るように命じてから、相談して、<sup>16</sup>言った。「あの者たちをどうしたらよいだろう。彼らが行った目覚ましいしるしは、エルサレムの住民全体に知れ渡っているのに、否定しようもない。<sup>17</sup>しかし、このことがこれ以上民衆の間に広まらないように、今後あの名によって誰にも話すなど脅しておこう。」<sup>18</sup>そして、二人を呼んで、イエスの名によって一切話したり、教えたりしないようにと命じた。<sup>19</sup>しかし、ペトロとヨハネは答えた。「神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、ご判断ください。<sup>20</sup>私たちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです。」<sup>21</sup>そこで、彼らは二人をさらに脅してから釈放した。皆の者がこの出来事について神を崇めていたので、人々の手前、どう処罰してよいか分からなかったからである。<sup>22</sup>このしるしによって癒された人は、四十歳を過ぎていた。

<sup>23</sup>さて二人は、釈放されると仲間のところへ行き、祭司長たちや長老たちの言ったことを残らず報告した。<sup>24</sup>これを聞いた人たちは心を一つにし、神に向かって声を上げて言った。「主よ、あなたは天と地と海と、そこにあるすべてのものを造られた方です。<sup>25</sup>あなたの僕であり、私たちの父であるダビデの口を通し、あなたは聖霊によってこうお告げになりました。

『なぜ、諸民族は騒ぎ立ち

諸国の民は空しいことを企てたのか。』

<sup>26</sup>なぜ、地上の王たちは立ち上がり

君主たちは集まって

主とそのメシアに逆らったのか。』

<sup>27</sup>事実、この都でヘロデとポンティオ・ピラトは、諸民族〔別訳→異邦人〕やイスラエルの民と共に集まって、あなたが油を注がれた聖なる僕〔別訳→子〕イエスに逆らい、<sup>28</sup>御手と御心があらかじめそうなるようにと定められていたことを、すべて行ったのです。<sup>29</sup>主よ、今こそ彼らの脅しに目を留め、あなたの僕たちが、堂々と御言葉を語れるようにしてください。<sup>30</sup>どうか、御手を伸ばし、聖なる僕イエスの名によって、病気が癒やされ、しるしと不思議な業が行われるようにしてください。」<sup>31</sup>祈りが終わると、一同の集まっていた場所が揺れ動き、皆、聖霊に満たされて、堂々と神の言葉を語りだした。

## マルコによる福音書 1章29～39節

<sup>29</sup>一行は会堂を出るとすぐに、シモンとアンデレの家に行った。ヤコブとヨハネも一緒にあった。<sup>30</sup>シモンのしゅうとめが熱を出して寝ていたので、人々は早速、彼女のことをイエスに話した。<sup>31</sup>イエスがそばに行き、手を取って起こされると、熱は引き〔直訳→去り〕、彼女は一同に仕えた〔別訳→一同をもてなした〕。<sup>32</sup>夕方になって日が沈むと、人々は、病人や悪霊に取りつかれた者を皆、御もとに連れて来た。<sup>33</sup>町中の人々が、戸口に集まった。<sup>34</sup>イエスは、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちを癒やし、多くの悪霊を追い出して、悪霊にものを言うことをお許しにならなかった。悪霊がイエスを〔異本→イエスがメシアであると〕知っていたからである。

<sup>35</sup>朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。<sup>36</sup>シモンとその仲間はイエスの後を追い、<sup>37</sup>見つけると、「みんなが捜しています」と言った。<sup>38</sup>イエスは言われた。「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、私は宣教する。私はそのために出て来たのである。」<sup>39</sup>そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。

## 黙想のためのノート

## 次主日の教会暦と聖書日課

・6月7日「聖霊降臨節第3主日」の日課主題は「」。  
 ・旧約日課は、「歴代誌下」から、ユダ王アサの時代の預言者に関する伝承説話箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、「第二の聖霊降臨」と言われる出来事の箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、主イエスがカファルナウムのシモンとアンデレの家を拠点とされ始めたころの様子を伝える箇所。

## 旧約日課(歴代下 15 章より)

・「歴代誌」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分では「諸書」の最後に置かれた歴史物語文書。「エズラ記・ネヘミヤ記」(ユダヤ教では両書で一書)が後に接続する形で編纂された「イスラエル正史物語」で、ほぼ南王国ユダの「王国史」として構成されている。「王国史」部分は、正典「前の預言者」に含まれる「列王記」を参照していると考えられるが、他の独自の資料も用いて、もっぱら「ダビデ王家礼賛」の立場からイスラエル史を物語っている。同時期の北王国については、南王国に関連する事柄を除くとほとんど無視されている。これは、「列王記」の大部が南王国の動向よりも北王国の栄枯盛衰を物語ることに費やされていることとは対照的であり、また、「列王記」では北王国史において重要なカギを握る人物として登場する預言者エリヤおよびエリシャも、本書では描かれず、わずかに同名の「預言者エリヤ」からの手紙という記述が時代錯誤的に現れるのみである(代下 27:12 以下。もっとも、「列王記」の記述する預言者エリヤが史実に即して描かれていない可能性もある)。

・日課箇所は、前 10 世紀末から 9 世紀にかけて南王国ユダの王位にあったアサ王の時代の出来事として物語られる一連の説話の一つ。二人の預言者オデドとアザルヤの告げる預言を聞き入れて、アサ王が占領地の町々から偶像を取り除かせたという逸話で、「列王記」にもアサ王に関する同趣旨の記述がある(王上 15:11 以下)。

・アサ王(在位=前 913~873 年頃)は、ソロモン王(在位=前 961~922 年頃?)没後に南北に分裂したとされる片割れの南王国ユダで、ソロモン王から数えて 3 代目に当たる王として伝えられている。ソロモン王没後に、単に南北に分裂するだけでなく、南王国ダビデ王家では王位継承を巡る混乱が生じていたことを「列王記」は伝えている。アサ王は、その混乱を終結させ、ユダ族およびベニヤミン族(またレビ族)によって構成される南王国ユダを確立した人物と位置づけられている。その功績の理由を、王が預言者の告げる預言を聞き入れ、主に対する忠実さを示したこととして描こうとしている(「列王記」も同趣旨)。

・預言者として登場する「オデドの子アザルヤ」および「オデド」については、本書および「列王記」に他の記述が見られず、詳細は不明。ただし、「預言者オデド」の名は、時代の異なる物語の中で見られる(代下 28:9)。あるいは「オデド」の名で知られる預言者の系譜が知られていたのかもしれない。本書には、本書にしか知られていない預言者に関する記述が多く見られる。

## 使徒書日課(使徒 4 章より)

・「使徒言行録」は、「ルカ福音書」の続巻として著された「初代教会正史物語」。概説は、資料「聖書と祈りの会 260527」など参照。

・本書の物語は、復活された主イエスが昇天までの間に弟子たちに聖霊授与の約束をされたことから始まり、その弟子たちが約束の聖霊の降臨を経験したことによって自ら神の御業を語り出し、世界宣教へと展開していくという粗筋で構成されており、しばしば「聖霊行伝」と呼ばれてきた。実際、本書では、1 章から最終 28 章まで満遍なく「聖霊」または「霊」の記述が見いだされる。ただし、「聖霊」が人格を有する存在として描かれているとは必ずしも言えない(確かに、一部にはそのように解釈できる描写もあるが)。むしろ、「聖霊」は、「神」の力が「人」に臨んで働いている状態を表して用いられていると解釈できる。実際、主イエスが昇天前に弟子たちに「父の約束されたもの」(使徒 1:4)と告げられたものは、「使徒言行録」では続く言説に見られる「聖霊」(同 1:5、1:8、また 2:4)であると同定されるが、前巻の「ルカ福音書」では「聖霊」とは言及されずに「高い所からの力」(ルカ 24:49)がこれを指し示していると解釈される。「ルカ文書」(福音書+使徒言行録)では、「イエス」や「聖霊」は、しばしば「神」に従属する存在であるかのように描写されている(正統教義の「三位一体」の定式には必ずしも一致しない)。

・日課箇所は、聖霊降臨を経験した弟子たちの教会が、その日のうちに 3000 人の仲間を受け入れ(使 2:41)、さらに短期間のうちに 5000 人にまで仲間を増やしたとされる叙述(同 4:4)を受けて、当局に目をつけられた弟子たちが尋問を受けながらも「大胆な態度」で自分たちの考えを語り得ていた背景として、彼らの教会の聖霊を信頼して祈る「大胆な態度」が描かれている。

・「大胆に」(13,29,31 節)と訳されている「パッレーシア」は、本書中では他に、「はっきり」(2:29)、「自由に」(28:31)とも訳されている語。用例の多い「ヨハネ福音書」では、「公然と」(ヨハネ 7:4,13,26、11:54、18:20)または「はっきり(と)」(同 10:24、11:14、16:25,29)と訳されている。いずれの用例でも、この語は「語る」と結びついて用いられている。そもそも、この語「パッレーシア」は、「パン(すべて)」+「レース(語ること)」でできており、この一語ですでに「大胆に語る」という意味が込められている。

・31 節「皆、聖霊に満たされて」は、2:4「一同は聖霊に満たされ」とほとんど同じ表現だが、「皆」は「ハバース」の訳、「一同」は「パース」の訳。「ハバース」も「パース」も「皆/すべて」の意味で用いられる語だが、「ハバース」は、「ハマ(同時に)」+「パース(すべて)」からできており、より同時性の強調された語。2 章でも「聖霊降臨」は全員に一人残らず起こったことという理解で描かれていたが、日課箇所では、それが彼らの集団全体(共同体!)の経験として起こったという理解で表現を変えたのかもしれない。もっとも、2 章の描写も、個々の聖霊降臨を互いに認め合うという意味では、共同体的な経験である。

## 福音書日課(マルコ 1 章より)

・日課箇所は、主イエスがガリラヤ湖で四人の漁師を弟子にして間もなく、彼らの居住する町であったカファルナウムを拠点にして活動していた初期の様子を伝える一連の記事の一部。

・カファルナウムは、ガリラヤ湖北端に位置する都市。この町には、漁師たちのうちシモン(ペトロ)とアンデレの住む家があり、この家が主イエスの活動の拠点になっていたことを、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)は共通して伝えている(マタイ 8:14、ルカ 4:38)。他の二人(ヤコブとヨハネ)の家については、いずれの福音書でも知られていないが、同様にこの町にあった可能性は高い。シモン・ペトロとアンデレは、もともとは、カファルナウムから少し離れた漁村「ベトサイダ」の出身であったと伝えられている(ヨハネ 1:44)。そうだとすれば、彼らは漁師として成功し、大きな市場のあるカファルナウムに拠点を移転してきていたのだろう。ヤコブとヨハネも、彼らの父ゼベダイが雇人を有するような事業者であったことが伝えられており(マルコ 1:20)、カファルナウムを拠点としていたと考えられる。当時、カファルナウムは、ローマが軍団を駐留させるほどの要衝で、シリアのダマスコやアンティオキアなどの大都市にも至る交易路に位置していた。考古学調査では、この町に魚を塩漬けにする加工場が見つかっており、漁業は多額の現金収入を得られる業種であったと考えられている。彼らは、その収入によって、カファルナウムに家族を住まわせられる家を建てていたのだろう。主イエスの活動資金も、彼らがそのかなりの割合を提供していた可能性がある。

・30 節「シモンのしゅうとめ」については、日課箇所を除いて詳しいことは知られていない。しかし、彼女が一行をもてなしていたことが伝えられており、主イエスと弟子たちのガリラヤ地方での活動を支える女性たちの一人であったと考えられる。

・31 節「起こされ」は、「エゲイロー」の訳。この語は、主イエスの復活の場面(16:6「復活なさって」)でも用いられているが、ニュアンスは「寝ていた者が目覚めること／横たわっていた者が身を起すこと」。病人の癒しの場面などで、この語が用いられている(2:11「起き上がり」など)。

・35 節「起きて」は、「アニステーミ」の訳。この語は、主イエスの受難予告などで用いられて「復活する」(8:31、9:9、9:31、10:34 など)と訳されるほか、死者蘇生の奇跡を描く場面でも用いられている(5:42「起き上がって」)。この語のニュアンスは、「(足で)立ち上がること」にある。「アニステーミ」の名詞形「アナスターシス」は、新約中ではもっぱら「復活」の意味で用いられている。

・35 節「人里離れた所」は、「エレーモス」の訳。この語は、「荒れ野」とも訳され、しばしば人の営みを避けるための場所として設定されていると考えられるが(1:3-4、1:12-13、1:45、6:31,32,35)、他方でこれらの霊的場(聖なる場!)が徐々に主イエスと人々の接する場として描かれていくことで、主イエスにおける聖俗の一致という視座を企図したものであると解することもできるかもしれない。

## 来週の誕生日 (6月7日～13日)

## 主日礼拝の讃美歌から

・21-352「来たれ全能の主」(= I 67)は、18 世紀英国メソジスト運動の中でイギリス国歌の曲に合わせて替え歌として歌われるようになった作者不詳の歌詞。曲は、この歌詞のためにイタリアの音楽家ジェルディーニが作曲。

・21-56「主よ、いのちのパンをさき」(= I 187)は、19-20 世紀米国のメソジスト信徒メアリー・ラスベリーの作詞で、夏期セミナーのために「聖書研究の歌」と題して書かれた。曲は、19 世紀米国で讃美歌作曲家として知られた音楽教師シャーウィンが、この歌詞のために作曲。

・21-78「わが主よ、ここに集い」は、19 世紀スコットランド教会の牧師 H.ボナーが作詞した聖餐讃美。彼は、1843 年のスコットランド国教会分裂に際し、自由教会派の指導者の一人。同じ自由教会の牧師であった兄からの依頼で作詞。曲は、英国教会の音楽家 E.ホブキンズが別の歌詞のために作曲。

## 21-352「来たれ、全能の主」

## Come, Thou Almighty King

1. Come, thou almighty King, / help us thy name to sing, / help us to praise! / Father all glorious, / o'er all victorious, / come and reign over us, Ancient of Days!
2. Come, thou incarnate Word, / gird on thy mighty sword, / our prayer attend! / Come, and thy people bless, / and give thy word success; / Spirit of holiness, on us descend!
3. Come, holy Comforter, / thy sacred witness bear / in this glad hour. / Thou who almighty art, / now rule in every heart, / and ne'er from us depart, Spirit of power!
4. To thee, great One in Three, / eternal praises be, / hence, evermore. / Thy sovereign majesty / may we in glory see, / and to eternity love and adore!

## 21-56「主よ、いのちのパンをさき」

## Break Thou the Bread of Life

1. Break Thou the bread of life, dear Lord, to me, / As Thou didst break the loaves beside the sea; / Beyond the sacred page I seek Thee, Lord; / My spirit pants for Thee, O living Word!
2. Bless Thou the truth, dear Lord, to me, to me, / As Thou didst bless the bread by Galilee; / Then shall all bondage cease, all fetters fall; / And I shall find my peace, my all in all.
3. Thou art the bread of life, O Lord, to me, / Thy holy Word the truth that saveth me; / Give me to eat and live with Thee above; / Teach me to love Thy truth, for Thou art love.
4. Oh, send Thy Spirit, Lord, now unto me, / That He may touch my eyes, and make me see: / Show me the truth concealed within Thy Word, / And in Thy Book revealed I see the Lord.

## 21-78「わが主よ、ここに集い」

## Here, O My Lord, I See Thee Face to Face

1. Here, O my Lord, I see thee face to face; / here would I touch and handle things unseen; / here grasp with firmer hand eternal grace, / and all my weariness upon thee lean.
2. Here would I feed upon the Bread of God; / here drink with thee the royal Wine of heaven; / here would I lay aside each earthly load, / here taste afresh the calm of sin forgiven.
3. I have no help but thine; nor do I need / another arm save thine to lean upon; / it is enough, my Lord, enough indeed; / my strength is in thy might, thy might alone.
4. Mine is the sin, but thine the righteousness; / mine is the guilt, but thine the cleansing Blood. / Here is my robe, my refuge, and my peace; / thy Blood, thy righteousness, O Lord, my God!